

## 重度を優先してこそ福祉

昨年十二月二十一日日本紙は新設の精薄者授産施設に重度障がい者四人が通園できない事態を報じていた。その四人を含めて精薄者の福祉を守るための市民運動が母体になって誕生した施設であるだけに、その決定にはだれもが納得し難いであろう。

この通園施設をふくめて授産施設は「自活」可能であることを法的な入所条件としている。しかし、現実はそのうち二割ほどでも自活可能になっているだろうか。「自活」は資格でなく目標と解したがよい。また、入所を決定する福祉事務所長は「必要がある」と思えば、その人が入所資格にあうかどうかを県精薄相談所の判定にかけるのである。その必要の有無を決めるのは福祉事務所側である。だから、所長が判定を求めなければ入所の道は残されている。幸いだれの巧みな計らいか四人の判定依頼は取り下げになっているらしい。

もちろん、所長は勝手に「判定の必要なし」とすることはできない。ここで試験的入所などと、福祉的識見しきけんと手腕しゅわんが問われてくる。いったい重度者を授産所に入所させ

ない理由は何か。ただ一つ、施設の制度的内容基準が重度者に適するほど整っていない、つまり理由は施設側にあるにすぎない。重度者の自立自活の意志をしめ出す権利はだれにもないはずだ。幸運にも施設側は重度者をとりたいたいとしているから、問題はない。この世界で四人の行き場はここしかないではないか。法の運用は人のために人がするのでなければならぬ。

今やボタンを一つ掛けるようになることも自立とするほど、福祉現場は深化しんかしている。自活への意志ある限り、自立への道に立つ者と私は信じる。重度者を一番後回しにし、重度施設でさえ重度者を敬遠してきた日本の福祉の悲しい歴史と現状を知るが故に、重度者を引き受けんとする『さつき園』の情熱は見事である。それを生かしてこそ福祉行政である。福祉に今必要なもの、それは勇氣。

(一九八五年一月二十二日)